

2022 年度春学期 日本事情 1 / 浅野担当分「日本の色彩」 第 2 回

「しろ」と「あお」、「あか」と「くろ」 — 古代日本の色名

「日本の色彩」第 2 回は、日本の色名の歴史についてです。日本語の「しろ（白）」「あお（青）」のように、どんな言語にも、色の名前を表す単語があります。第 1 回でお話ししたように、色と色の間に境目はありません。色空間でのどの範囲の色をひとつの色と認識し、どういう名前をあてはめるかは、物理現象ではなく人が決めることです。そして、それぞれの文化によって、色の名付け方は異なっています。

今日の講義では、人類に普遍的な「色の名付け方」を見いだした有名な研究を紹介し、さらに古代の日本でどのように色が名付けられていたかを紹介します。

色を表す言葉

世界の言語で、色の名前がどのようにつけられているかを調べた、Berlin と Kay による有名な研究があります [1]。彼らは、「色の名前は、異なる言語の間でも翻訳しやすい」ことに気づきました。そこで、「色を表す語彙」には世界の言語に共通する構造があるのではないかと考え、世界の 98 言語を調べました。その結果、次のことを導き出しました。

1. すべての言語には、「白」と「黒」にあたる語彙がある。
2. 色を表す語彙を 3 個もつ言語には、さらに「赤」にあたる語彙がある。
3. 色を表す語彙を 4 個もつ言語には、さらに「緑」か「黄」にあたる語彙のどちらか一方をもつ。
4. 色を表す語彙を 5 個もつ言語には、「緑」と「黄」にあたる語彙の両方をもつ。
5. 色を表す語彙を 6 個もつ言語には、さらに「青」にあたる語彙をもつ。
6. 色を表す語彙を 7 個もつ言語には、さらに「茶」にあたる語彙をもつ。
7. 色を表す語彙を 8 個以上もつ言語には、さらに「紫」「ピンク」「オレンジ」「グレー」や、それらの組み合わせにあたる語彙をもつ。

この研究成果は、世界の言語が多種多様であるにもかかわらず、色の名前に関しては共通する構造があることを見いだしたもので、きわめて画期的なものと受け止められています。発表されてから 50 年を経っていますが、現在でもよく引用される研究です。

この研究で、日本語は「8 個以上」のグループに属し、基本的な色名は、白（しろ）・黒（くろ）・赤（あか）・緑（みどり）・黄 [色]（き [いろ]）・青・茶 [色]（ちゃ [いろ]）・紫（むらさき）・桃色（ももいろ）・橙 [色]（だいたい [いろ]）・灰色／鼠色（はいいろ／ねずみいろ）であるとされています。

日本語の伝統的な色名

一方、この研究では、日本語に関しては多少疑問があることも述べられています。日本語の色名で、もっとも古くからある基本的なものは「白（しろ）」「黒（くろ）」「赤（あか）」と「青（あお）」であり、「緑（みどり）」と「黄（き）」は後からできた新しい語彙であるといわれています。その証拠としてよくあげられるのが、色名に「～い」をつけて形容詞にするとき、「白い」「黒い」「赤い」「青い」はいずれも言えるのに、「緑い」「黄い」とは言えないことです。

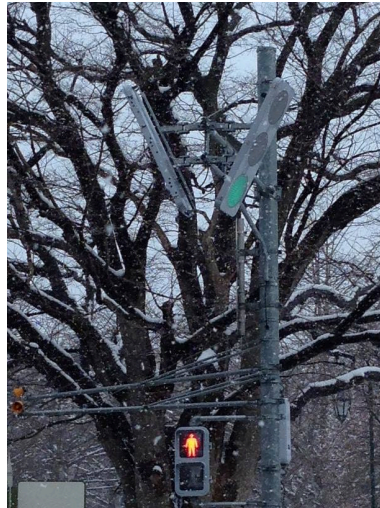


図 1: 緑色の「青信号」。

このことを見ると、日本語は歴史的には、上記の法則とは矛盾しているように思えます。この研究でもこの疑問点はあげられており、さらに研究が必要であると述べられています。一方、この疑問に答えられる可能性のある事実として、この研究でも触れられていることがあります。それは、日本語の「青」は、昔は「緑」を含んでいた、ということです。現在でも、図1のように、交通信号の「緑」を「青信号」とよぶのは、その名残といわれています。

「しろ」と「あお」、「あか」と「くろ」

上で、日本語のもっとも基本的な色名は「しろ」「くろ」「あか」「あお」と述べました。上記の Berlin と Kay の研究でも、白と黒がもっとも基本的な色名であり、次が赤であるといわれています。また、現代の感覚では、白と黒は色味のない「無彩色」であり、一方、赤と青は、それぞれ「暖色」「寒色」と言われています。つまり、白－黒、赤－青がそれぞれ対になる関係であるように思われています。

しかし、伝統的には、この対立関係は「しろ」－「あお」、「あか」－「くろ」という組み合わせだったと言われています [2]。現代では、「色名」というのは、前回の講義で説明した「顕色系カラーシステム」における「色相」をおもに表すものです。しかし、古代の日本では、「しろ」「くろ」「あか」「あお」という言葉は、むしろ「明度」「彩度」を表す言葉だったと考えられています。すなわち、以下のような関係です。

- 「しろ」…「顕」という漢字があてられており、くっきりした、彩度が高いことを表す。
- 「あお」…「漠」という漢字と対応しており、はっきりしない、彩度が低いことを表す。
- 「あか」…「明」という漢字と対応しており、明るい、つまり明度が高いことを表す。
- 「くろ」…「暗」という漢字とがあてられており、暗い、つまり明度が低いことを表す。

また、「あお」は「漠」、すなわち「漠然」の「漠」で、「漠然とした色」という意味合いであり、白・黒・赤以外のさまざまな色相を表していたといわれています [3]。



図 2: 山陽・九州新幹線の電車。「白藍（しらあ
い）色」



図 3: 東海道・山陽新幹線の電車。こちらは白色。

日本における白に対する嗜好

「万葉集」は、8世紀末に編纂されたといわれている、日本に現存する最古の和歌集で、4500首以上の和歌が収められています。文献[4]によると、万葉集に収められている歌のうち、色名を含むものの41%に、「白」が含まれているそうです。このように、白は日本では長らく好まれている色です。また、美しいものの代表を「雪・月・花」とよぶように、白い雪景色は美しいものの筆頭とされていました。文献[5]では、白が同時に「無」を表現し、それによって無限の広がりを表している、と考察されています。

一方、文献[6]では、白に対する好感は、日本だけでなく、日本・中国・インドネシアに共通するものという調査結果が報告されています。また、文献[7]によれば、「白」が表す色の範囲は、黄みがかった色や青みがかった色などもっと広がったのが、現代では純粋な白だけに意味が狭くなっていると述べられています。古い時代の「白」に対する嗜好を論じるには、そのことを考慮する必要があります[8]。現在でも、日本の伝統色名では、「白」のついた色名で表される色はかなりの色味の違いがあります[9]。また、図2の新幹線電車の色のように、青みがかった白も白の範疇に含められている場合があります。

「赤」と「紅」、「青」と「藍」

ここまでの「しろ・あお・あか・くろ」の話に関連して、2021年度の卒業研究[10]で行った、日本と中国での「赤／紅」・「青／藍」の感覚の違いの調査を紹介します。この研究では、日本人・日本在住中国人・中国在住中国人に対して、漢字から思い浮かべる色の違いを、「赤／紅」という組と「青／藍」という組について調査しました。

この調査はリモートで行いました。リモート調査では、調査協力者の端末画面に現れている色は、それぞれの協力者で異なっています。そのため、厳密な色の違いを調べる実験は、通常はリモート調査ではできません。そこで、この調査では、漢字の組に対して、同一の画面に出ている色の間の相対的な違いを調べました。

図4は「赤／紅」から色を選ぶ調査の例を示したものです。まず「赤」という漢字から思い浮かべる色を、上段の5色相からひとつ選びます。そして、選んだ色相に対して、下にある9種類の明度彩度からひとつを選びます。次に、同じ画面上で、「紅」という漢字についても同じ調査を行います。「青／藍」についても同様です。

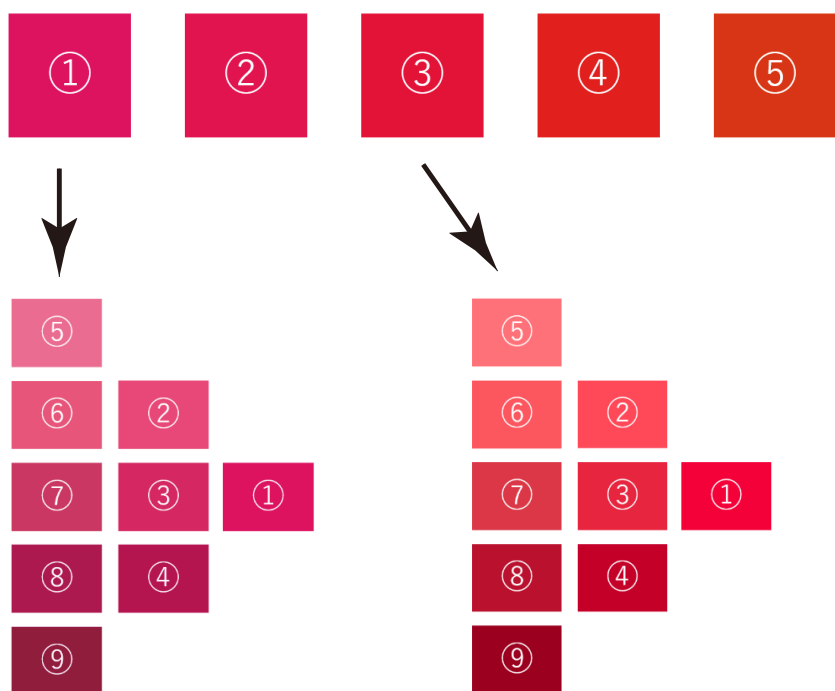


図 4: 「赤／紅」について色を選ぶ調査。上段の 5 色相からひとつを選び、選んだ色相に対して、下にある 9 種類の明度彩度からひとつを選ぶ。

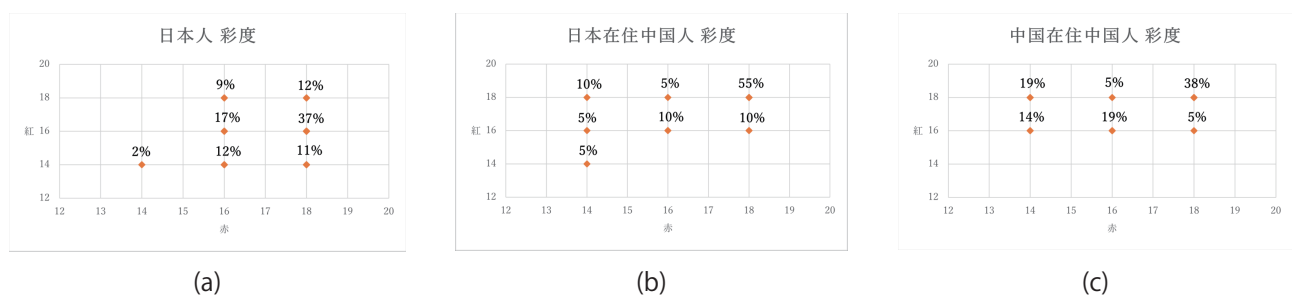


図 5: 「赤／紅」で選ばれた色の彩度の違い。(a) 日本人 (b) 日本在住中国人 (c) 中国在住中国人。

図 5 は調査結果の例で、「赤」と「紅」で選ばれた色の彩度の違いを示したものです。横軸は「赤」で選ばれた彩度（マンセル chroma）、縦軸は「紅」で選ばれた彩度です。両方の漢字について同一の彩度を選んだ人は、両国の中国人のほうが日本人よりも多いことがわかります。また、日本人は「紅のほうが赤よりも彩度が低い」と答える傾向があり、一方両国中国人では「紅のほうが赤よりも彩度が高い」と答える傾向がありました。

*

参考文献

- [1] B. Berlin and P. Kay, Basic Color Terms, Their Universality and Evolution, CSLI Publications (1999, original version 1969).
- [2] 佐竹昭広, 萬葉集抜書, 岩波書店 (1980).
- [3] 青色あれこれ (綺陽装束研究所) <http://www.kariginu.jp/kikata/iro-ao.htm>
- [4] 伊原昭, 色彩と文学ー古典文学を調べて, 桜楓社 (1959).
- [5] 黒川威人, 古代詩歌に見る日本美の特性, デザイン学研究 (日本デザイン学会第 60 回研究発表大会 概要集), 6B-06 (2013).
- [6] 齋藤美穂, 日本における白嗜好とその背景 ー アジアにおける国際比較研究を通してー, 日本色彩学会誌, 23 巻 3 号, 158-167 (1999).
- [7] 福田邦夫, 色の名前はどこからきたか, 青娥書房 (1999).
- [8] 齋藤志穂, 日本文化における嗜好色としての白, 関西大学総合情報学部 2019 年度卒業論文 (2020).
- [9] 和色大辞典 <https://www.colordic.org/w>
- [10] 中村美智子, 中国と日本での色名と色認識の違い, 関西大学総合情報学部 2021 年度卒業論文 (2022).